

報告・資料

九州大学附属図書館所蔵 国際法史・国制史コレクションについて

大中 真¹

On the Collection of the History of the Law of Nation and “the Constitution”
in the 17 and 18 Century, Kyushu University Library

ONAKA Makoto¹

キーワード：九州大学図書館、国際法史、国制史、国家思想家

1 図書館

九州大学附属図書館には数多くの所蔵コレクションが存在する。その中でも「17-18世紀国際法史・国制史コレクション (Collection of the History of the Law of Nation and “the Constitution” in the 17 and 18 Century)」は、その数や所蔵価値の貴重さからも、国際法史に関して日本国内でも有数のコレクションと思われる。「主として17-18世紀にヨーロッパで刊行された国際法・国制に関する刊本512タイトル (498冊) の集成 (ラテン語及びドイツ語が大半を占める) であり、国際法の形成発展期の代表的著作を網羅し、2世紀にわたるこの分野の法学の発展を通鑑しうるコレクションである」と、大学図書館のウェブサイト上には説明されている⁽¹⁾。また、その意義については、同図書館ウェブ上での解説文を執筆した九州大学法学部の柳原正治教授による小論が簡潔かつ要点をまとめている。すなわち、コレクションの中心をなすのは17-18世紀の「国家思想家 (Staatsdenker)」たちである。彼らは、「『政治学』、自然法論、国際法 (諸国民の法) 論、帝国公 (国) 法論、ポリツァイ学・行政論、それに哲学、といった諸分野に従事した学者群を指す」⁽²⁾。神聖ローマ帝国時代、学問区分は現在と大きく異なっており、また学問分野の細分化もなされていなかったため、彼らの国際法論の一部を取り上げたところで「国際思想家」たちの真の理解には到達しない、それゆえ当時の理論状況や学問状況を総体的に理解する必要がある、というのがこの大掛かりなコレクション収集の意味のようである。また、法学博

¹ 桜美林大学リベラルアーツ学群教授

士学位請求論文が多く含まれているのも特徴だが、それも上記の理由によるという。さらに、同コレクションのすべての図書について、タイトルページ（題扉）を撮影して画像化し、同大学図書館の検索画面上に掲示されていることも特筆すべきである。これは、「当時の図書には、タイトルページに非常に多くの情報が書き込まれている」からであるが⁽³⁾、読者としてはそれだけでも大きな研究への端緒となる。



写真1 九州大学中央図書館



写真2 同図書館内部

コレクションが所蔵されている九州大学中央図書館は、福岡市西区の広大な伊都キャンパスにあり、博多駅から地下鉄、JR線、バスを乗り継いで約1時間の場所になる。大学創立百周年を記念して2018年に開館したばかりの壮麗で開放的な空間の建築であり、350万冊の収納が可能だという（写真1および2）。3階が入り口だが、総合案内やレファレンスのカウンターの奥に貴重書閲覧室があり、ここでコレクションを見ることが可能である。貴重書の閲覧には書面による事前予約と各種手続きが必要だが、席数が限られており、早めの問い合わせが望まれる。閲覧室への入室は厳しく制限されており、必ず洗面で石鹸による手洗いを済ませてから、粘着床マットの上で上靴の汚れを落とした上でスリッパに履き替え、職員同伴で小部屋に入るといった規則が徹底されている。欧米の公文書館のように、あらかじめ閲覧希望資料はブックシェルフに用意されていて、必ず書見台を用いて丁寧に資料を読むようにと職員から念を押されて、資料解読に挑むこととなる（写真3）。なお、図書館入り口横には石窯パン工場の潇洒なカフェがあり、昼食時間を多く取られずにすぐに閲覧室に戻ることができる（公文書館や貴重書室を利用する研究者にとって、これがどれだけ有難いことか）。

2 コレクション概要

同コレクションは平成7年（1995年）度所蔵の大型コレクションであり、前述のように

主に17-18世紀のヨーロッパ各地で刊行された国際法や国法に関する原書から成り立っている(19世紀のものもある)。合計で512タイトル、498冊から構成されており、同図書館のウェブサイトにも書誌情報が詳細に掲示されている。それによると、ドイツ語図書が297、ラテン語図書が284、フランス語図書20、オランダ語図書2、英語図書1となっている(全体の冊数が一致しないのは、複数言語にまたがる図書がそれぞれ複数言語で数えられているためと考えられる)。このように、ドイツ語およびラテン語図書が圧倒的な数を占めている。本コレクションの分類は独特であり、(1) 国際法(international law)、(2) 地域法(regional law)としてその下位分類で1. ヨーロッパ、2. ドイツ、3. フランス、4. イングランド、5. スカンディナヴィアと5つに分かれる。特にドイツは文献の数が際立っているため、さらに著者のアルファベット順に7つのグループに下位分類されている(A-C, D-G...という具合に)。最後に(3) 雑集(miscellanea)となっている。



写真3 貴重書閲覧室。壁には孫文直筆の額。

例えばウェブ上の文献情報をざっと一瞥しただけでも、H. グロティウス、G. F. v. マルテンス、C. バインケルスフーク、J. セルデン、E. d. ヴァッテル、Chr. ヴォルフ、S. プーフェンドルフ、J. J. モーザー、J. F. クリュバーなど、国際法史の文脈で名前が挙がる思想家の著作を、同コレクションの中に見ることができる。日本国内において、これだけの原典を同じ場所で同時に閲覧できることだけでも贅沢なことである。

ところで九州大学図書館には、本論で紹介するコレクション以外に、国際法に関する貴重な書籍が以前から所蔵されている。その理由として、九州大学法学部には大澤章(1889-1967)、伊藤不二男(1911-1987)、高林秀雄(1927-1997)、柳原正治(1952-)、明石欽司(1958-)と、国際法史を専門とする歴代の教授たちの連綿とした伝統が挙げられる⁽⁴⁾。特に「国際法の父」フーゴー・グロティウスの著作の豊かさは群を抜いており、柳原正治が解説しているように、世界的にも貴重な『戦争と平和の法』の1625年刊行の初版本第3刷が所蔵されており⁽⁵⁾、しかも背表紙を含む全頁858枚の鮮明な画像がウェブ上で一般公開されている。

何ら制限なく、誰でも自由に閲覧することが可能であり、このような九州大学図書館の姿勢には敬意を表したい。グロティウスの『戦争と平和の法』は、上記の初版に加え1631年版、1632年版、1642年版、1646年版と、生前のグロティウスが自ら校訂を繰り返した版がすべて所蔵されているのも、驚くべきことである。

3 コレクション事例

本論は、国際法史コレクションの全面的な分析や解読が目的ではなく、その存在の紹介にすぎない。筆者が現地訪問調査した日数も限られており、以下では筆者が閲覧室で直接原典を自ら手に取って確認した蔵書のごく一部を紹介したい。

- (1) Grotius, H., *Hugonis Grotii. De iure belli ac pacis libri tres*, (Amstelaedami, 1670). (A/GR/1)

ネーデルラントの国際法学者、グロティウスの『戦争と平和の法』ラテン語、アムステルダム版、1670年刊行のものである。既述のように同書は1625年が初版の刊行で、グロティウスは1645年に亡くなっているため、死後比較的早い時期の書物である。本文だけで620頁にも及ぶ長編であること、「自由海論」も併録されていることを確認できた。

- (2) Grotius, H., *De iure belli ac pacis libri tres*, (Amsterdaedami, 1735). (A/GR/2)

初版から100年近く経ったグロティウスの『戦争と平和の法』1735年アムステルダム版、ラテン語版である。特徴は、面表紙の前にグロティウスの肖像画と法の支配を象徴する寓意画が描かれていることである（以下の画像2枚を参照）。本文中には注釈がびっしりと書き込まれており、頁数はさらに増えて本文だけで1040頁にも及んでいる。「自由海論」も収められている。本書の特徴は、刊行当時の法学者ジャン・バルベイラクが序文を寄せていることであり、写真左の表紙には彼の名前が読み取れる。

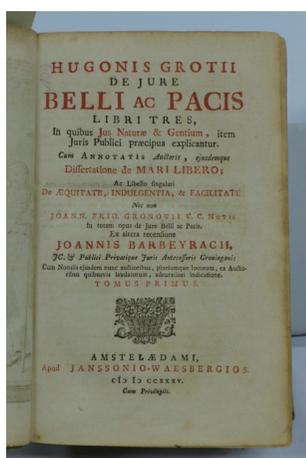


写真4, 5 グロティウス『戦争と平和の法』1735年版の中表紙および扉絵。

- (3) Grotius, H., *Le droit de la guerre, et de la paix*, (Amsterdam, 1724). (A/GR/3)

1724年刊、アムステルダム版、前述のバルベイラクによる貴重なフランス語翻訳版である。(1)と(2)と比べてもかなりの大型本である。『戦争と平和の法』のみを仏語訳し、「自由海論」などは収録されていない。

- (4) Grotius, H., *Enucleatus sive Hug. Grotii de jure belli ac pacis*, (Sedini, 1693). (A/GR/4)

これもグロティウスの『戦争と平和の法』の1693年版であるが、縦14cm、横8.5cm、厚さ3cmの超小型本で、おそらく携帯用の摘要版と思われる。

- (5) Grotius, H., *Hugonis Grotii, Batavi, parallelon rerumpublicarum liber tertius*, (Te Haarlem, 1801). (B-1/GR/1)

グロティウスの著作であるが、あまり日本では知られておらず、あえてラテン語から訳すと『諸共和国の比較—アテナイ人、ローマ人、バタヴィア人の習俗と特性について』となる⁽⁷⁾。

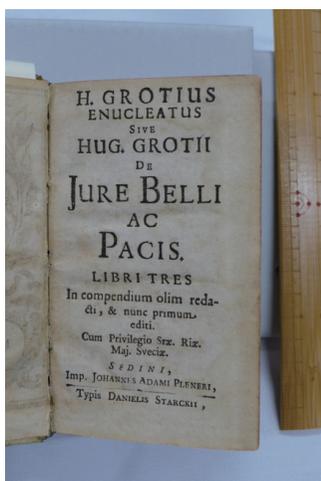


写真6 グロティウス『戦争と平和の法』1693年版(左)
撮影時に物差しを当てたので、本の小ささがよく分かる。

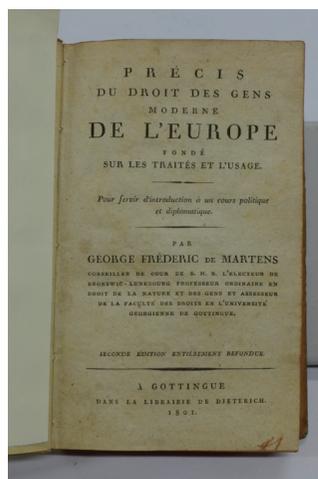


写真7 マルテンス『ヨーロッパ近代国際法概要』1801年版(右)

- (6) Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, (London, 1735). (C/LO/1-1/2)

本コレクションには、『統治二論』で有名なイングランドの代表的思想家であるジョン・ロックの著作も収められている。タイトルは『人間知性論』である。原書は1689年に刊行されたので、それよりは時代が下るが、それでも18世紀前半刊行の貴重な書籍である。

- (7) De Martens, G. F., *Precis du droit des gens moderne de L'Europe fonde sur les traites et l'usage*, (Gottingue, 1801). (A/DE-1/1)

国際法史では必ず名前が挙げられるドイツの国際法学者かつ外交官である、ゲオルク・フリードリヒ・フォン・マルテンスの著作『ヨーロッパ近代国際法概要』である。マルテンス存命中に刊行された点で、貴重な書籍と言える（マルテンスは1821年に亡くなっている）。

- (8) De M***, M., *Lettres Persanes. Nouvelle*, (Amsterdam, 1760). (C/DE-2/1)

書誌情報も原著も匿名になってはいるが、『法の精神』で著名なフランスの思想家C.モンテスキューの『ペルシア人の手紙』で、小型本である。モンテスキュー死後5年後に刊行された版である。

- (9) Vattel, E. d., *Le droit des gens*, (Paris, 1856). (A/VA/1-1/3)

グロティウスと並ぶ国際法史上の最も重要な思想家、ヴァattelの著作『国際法』のフランス語版全3巻である。しかし、最初の刊行は1758年なので、本書はそれから1世紀後の比較的新しい版である。

4 コレクション周辺

今回の九州大学中央図書館での調査は、膨大なコレクションのごく一端を垣間見たに過ぎない。しかし、厳重な管理と図書館スタッフの方々の献身的な対応には、強い感銘を受けた。特にグロティウスの『戦争と平和の法』については、細かな版の違いを含む複数の貴重な原典が閲覧可能な状態で収蔵されていることが分かり、日本国内で世界水準の原典調査が可能であることを認識した。さらに調査過程で、国際法史コレクションに連なる所蔵資料を確認したので、簡潔に紹介したい。

A. 「万国公法コレクション (Universal Public Law Collection)」

これは、江戸末期から明治の日本で、ヨーロッパ国際法の受容期に重要とされた国際法＝万国公法に関するコレクションとして九州大学図書館が2012年度に購入、合計37冊の貴重書庫所蔵のものである⁽⁸⁾。内容は、グロティウス、R. ズーチ、バインケルスフーク、J. J. プラマキなど国際法史初期の著作から、幕末から明治維新初期の日本の国際法学に大きな影響を与えたH. ホイトン、T. ウールジイなど、ラテン語、英語、フランス語、ドイツ語をはじめとするヨーロッパ各国語で著された書籍から成っている。特徴的なことは、コレクションの性格上、オランダ語で書かれた、グロティウス以外の国際法学に関する文献も複数含まれていることである。

ただし、ホイトン（中国名：恵頓）の『国際法原理』を、中国のアメリカ人宣教師W. マーティン（中国名：丁韞良）が『万国公法』として漢語訳し、それが日本に輸入されたことで日本に国際法が受容された経緯があるものの、漢籍の書物はこのコレクションの目録には含まれてはいない。しかし、(美國) 恵頓選、(美國) 丁韞良譯『萬國公法 4巻』は、「廣瀬文庫」として同図書館の準貴重書室に所蔵されており、さらにはデジタル化され一般公開されているので、誰でも閲覧可能である⁽⁹⁾。

B. 「伊藤不二男文庫 (Ito Fujio Collection)」

本論で既述した、九州大学法学部教授を務め、『ビトリアの国際法理論』（有斐閣、1965年）によって昭和41年（1966年）に日本学士院賞を受賞した伊藤不二男の、法学関係を中心とする旧蔵書から成っている⁽¹⁰⁾。2011年度に遺族の伊藤道郎（伊藤不二男の長男）によって九州大学図書館に寄贈されたもので、和書・洋書合わせて約400冊ほどの数がある。同文庫は貴重書室や特別な場所に保管されているわけではなく、広い館内のあちこちに分散して、開架図書として収蔵されている。筆者は図書館員に場所を尋ね、20世紀アメリカの国際法学者J. B. スコットのいくつかの著作に、「伊藤道郎氏寄贈」の印が押されていることを確認した。例えば、スコットの『国際法と制裁措置のスペイン的概念』（Scott, James Brown, *The Spanish Conception of International Law and of Sanctions* (Washington: Carnegie Endowment for International Peace, 1934)) は、原書の入手が困難だったのか、全ページをコピーしたものを手製で丁寧に製本されたものであり、労苦が偲ばれる。同文庫の目録はないものの、国際法史に関する貴重な図書が数多く含まれているものと思われる。

むすび

本論では、九州大学中央図書館所蔵の「17-18世紀国際法史・国制史コレクション」を紹介し、さらに関連する「万国公法コレクション」および「伊藤不二男文庫」にも触れた。いずれも、国際法史研究にとって極めて重要な文献を所蔵しており、これらを日本国内で

直接手に取って閲覧、調査できる利点は大きい。筆者自身、オランダのハーグにある国際司法裁判所の平和宮図書館 (Peace Palace Library) へ、グロティウス『戦争と平和の法』原典の現地調査訪問をする計画だったところ、新型コロナウイルスのために3年連続で渡航不可能となり、途方に暮れていた折、九州大学のコレクションの存在を同業の研究者から聞き、今回の訪問に結びついたという経緯がある。2020年1月に始まったcovid-19のパンデミックは、社会科学の研究者にとって、海外での外交文書や公文書調査などの現地訪問の機会を奪ったと同時に、世界各地で急速な史料の電子データ化をもたらし、日本国内、しかも自宅にいながらにして、以前であればまず見ることの叶わなかった第一次資料にいつも簡単にアクセスできるという、研究環境の激変をもたらした。そうは言っても、すべての過去の文献史料が電子化されたわけではなく、またごく近い将来に電子化される見込みのない文献も多い。また、ヴァーチャル画面だけでは分からない、直接自分の触覚で本のページをめくらないと気がつかない事実も間違いなく存在する。その意味では、国際法史の次世代を担う若い研究者たちに、この小論が何かの役に立てば幸いである。

筆者注：本論中で掲載した写真はすべて筆者が撮影したものであり、事前に九州大学図書館から撮影および紀要論文掲載の許可を得ていることを付記する。

なお、本論の資料調査研究は、2022年度桜美林大学学内学術研究振興費 (競争資金) の成果の一部である。

注

- (1) 九州大学附属図書館「17-18世紀国際法史・国制史コレクション」<<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/kokusaiho>> (2023年3月9日閲覧)
- (2) 柳原正治「17-18世紀国際法史・国制史コレクションについて」九州大学図書館報『図書館情報』33巻4号 (1998年) 39-40頁。<https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1470454/tkh_1997_33_4.pdf> (2023年10月18日閲覧)
- (3) 同上。
- (4) 九州大学法学部の国際法講座担当教授が、代々国際法史研究の伝統を受け継ぎ、守ってきたことについて、その学問的背景も含めて、現在教授職にある明石欽司先生から直接に長時間話を伺った。また今回の筆者の国際法史コレクション調査に際しては、実現の1年以上前から明石先生に便宜を図っていただき、大変お世話になったことについて、この場を借りて感謝申し上げたい。九州大学法学部明石欽司教授へのインタビュー、2023年3月8日。さらに、以下の記述を参照。明石欽司、韓相熙編『近代国際秩序形成と法—普遍化と地域化のはざままで』(慶應義塾大学出版会、2023年) v頁。
- (5) 柳原正治「国際法関係貴重文献—グロティウス『戦争と平和の法』」九州大学百年の宝物刊行委員会編『九州大学百年の宝物』(丸善プラネット、2011年) 92-93頁。<https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1526202/chapter04_1.pdf> (2023年10月18日閲覧)

- (6) *Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres : in quibus ius naturae & gentium, item iuris publici praecipua explicantur* (Apud Nicolaum Buon, Parisiis, 1625). 九州大学法学部所蔵『戦争と平和の法』1625年刊行初版本 <<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/grotius/top.htm>> (2023年3月9日閲覧)
- (7) 題名の日本語訳は、国際法史が専門でグロティウスの研究者である、一橋大学元学長かつ名誉教授の山内進先生のご教示による。また最初に、九州大学には国際法史に関する多くの蔵書があるとの示唆を受けたのも、山内先生であった。この場を借りて深く感謝申し上げたい。
- (8) 万国公法コレクション、九州大学附属図書館 <<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/bankokukoho>> (2023年10月30日閲覧)
- (9) 書誌情報および画像にて本文ファイルを見ることができる。 <https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD820&bibid=431297&opkey=B169833028531340&start=1&listnum=7&place=&totalnum=64&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=00000000000000000000> (2023年10月30日閲覧)
- (10) 伊藤不二男文庫、九州大学附属図書館 <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/ito_fujio> (2023年10月30日閲覧)